

住居跡と共存して集落を構成したと考えられる遺構は限られている。その中で、長軸約2m規模の小判型を呈するS K 251は、早期に特徴的な形態の平基鏃14点が一括出土した。新潟県佐渡に所在する堂の貝塚（金井町教委1977）は石鏃の副葬例として著名であり、中期前半を主体とした土坑群の中に埋葬人骨を伴うものが7基確認された。このうちの1基の人骨頭部右脇に大形で画一性のある石鏃13点が束ねられた状態で出土したことから、副葬品と判断された。S K 251では中央部よりやや西側での散在した出土状況ながら、堂の貝塚例と共通した内容であり、出土品を副葬品と見て墓墳と認識した。またS T 290等からは、これら平基鏃と共にこの時期に特有な形態の、いわゆる松原型石匙が出土している。調査区から窺い知れる当該期の集落は、堅穴住居跡4～5棟に貯蔵穴を含む土坑が30基前後から形成されたと考えられる。これらが一時期の所産と判断し得る資料は少ないが、住居跡は一部共存もしくは近接した時期での変遷と捉えて大過ないと思われる。墓墳は1基のみが単独的に検出されたことから察して特有なものと認識され、一括出土した石鏃の様相などから、この集落における特異な人物の埋葬墓と把握しておきたい。

2 縄文土器の型式

遺跡から出土した縄文土器は、早期中葉～中期末葉にかけての内容を包括している。これらの大半は小破片で、全体の器形や文様構成の察知できる資料はほとんどない。ここでは、先の第V章-1に示した分類基準に対するの編年的な位置付けを行いたい。

第I群土器は早期中葉～末葉に属する。県内で当該期の資料が出土した遺跡として大野平遺跡のほか、尾花沢市森岡北遺跡（大類1979）、同市いるかい遺跡（山形県教委1983）、大石田町大畑山遺跡（加藤1972）、同町玉ノ木平B遺跡（小向1976）、村山市赤石遺跡（山形県教委1981）、同市山ノ内遺跡（加藤1982）、西川町弓張平A遺跡（西川町教委1980）、同町月山沢遺跡（山形県教委1980）、山形市にひやく寺遺跡（山形県教委1985）、南陽市月ノ木B遺跡（山形県教委1989）、川西町千松寺遺跡（川西町教委1980）、米沢市清水北C（八幡原No.24）遺跡（米沢市教委1976）、同市二タ俣A（八幡原No.5）遺跡（米沢市教委1983）、同市梓山a遺跡

（山形埋文2006）、小国町市野々向原遺跡（山形埋文2000）、旧温海町大淵台遺跡（山形県教委1981）などが挙げられる。1～3類は貝殻沈線文系土器に属し、1類と2類は関東の田戸下層式に併行する一群である。県内での出土例のうち、赤石・大野平・二タ俣A・市野々向原の4遺跡で略完形の鋭角的な尖底深鉢を認めており、沈線文や貝殻復縁圧痕文に加え、連続刺突文等により文様構成されることが知られる。3類は田戸上層式に併行するもので、東北地方南部の大寺・常世式に比定される。口縁部に描出された重層的な刺突文を文様要素とするが、連続した刺突文による意匠は前段階における貝殻復縁圧痕文の置換となったものであろう。4類の条痕文土器は、関東の子母口式～茅山上層式までの広い範疇で捉えられる。施文に使用された工具はサルボウ等の貝殻復縁によるものと思われ、異方向から施文することにより文様効果を高めている。5類・6類は茅山下層式以降の末葉期に伴うもので、東北南半ではこれと併行関係にある素山式～大畑G式に比定されよう。

第II群土器は前期初頭に当てはめられ、当該期の土器がまとまって出土した遺跡には尾花沢市いるかい遺跡（前掲）、大石田町庚申町遺跡（大石田町教委1984）、東根市小林A遺跡（東根市教委1975）、天童市上荒谷遺跡（山形埋文1996）、山形市にひやく寺遺跡（前掲）、南陽市大野平遺跡（前掲）、米沢市法将寺遺跡（米沢市教委1985）、同市松原遺跡（山形埋文1994）、同市梓山a遺跡（前掲）、小国町墓窪遺跡（山形県教委1982）などがある。1類は上川名Ⅱ式に比定される。図化した資料は小片で文様構成が不明であるが、撚糸圧痕文に加えて沈線文や刺突文などを組み合わせた意匠をもつと察せられる。2～4類は上川名Ⅱ式～大木2a式の範疇で捉えられるが、3類の羽状縄文は撚りの異なる2本の原体を交互に回転させた非結束の事例が主体を占めることから、大方は大木1式に含まれるものと理解される。

以上は土器型式に相当させた場合の編年的な位置付けであり、S T 240等の住居跡では早期末葉～前期初頭の土器が伴出している。これらは一時期の所産と目されるため、各文様の消長が影響した結果の共伴と思考している。

第III群土器は前期後葉～末葉の所産である。1類は細い粘土紐を短く千切って折り重ねた鋸歯状の貼付文が特

徴で、大木5式に比定される。県内では尾花沢市いるかい遺跡（前掲）で当該期の住居跡1棟が検出されているほか、遊佐町吹浦遺跡（山形県教委1988）からまとまった出土例がある。2～4類は後続する大木6式に属するもので、2類の結節浮線文は関東の十三菩提式や北陸の朝日下層式に出自を求めることができる。3類の綾絡文は2類土器の地文となることが多いが、出土資料は口縁部に施文されており、文様帯をもたない事例と言える。4類とした2点の資料は肥厚する口縁部に特徴があり、太い数条の沈線と連続した刻み目を施文するもので、遊佐町吹浦遺跡（前掲）等に類例が知られる。

第Ⅳ群土器1類は、沈線による区画内に撚糸圧痕が充填される文様構成から、大木7b式に帰属するものと思われる。2類は中期末葉の所産で、大木10式に比定される。大木10式土器については、宮城県大梁川遺跡（宮城県教委1988）の調査における、遺物包含層からの層位的な出土資料を基にした三分案が定着している。本遺跡出土の4点は口辺部の小片であり、細分に照合させるまでの情報が少ないが、調整沈線を伴う第29図6と稜の低い微隆起線が描出される7・9は10式古相に、稜をもつ隆線と無調整の沈線を施す8を10式新相として位置付けておく。

3 弥生時代の様相

第1次調査区の東・南縁辺域を主として多数の弥生土器が出土したが、調査区内に当該期の遺構は見当たらない。遺物の在り方から近隣に該期の集落が存在したことは当然考えられ、地形的に見れば付近で標高が最も高い1次調査区北側に面する畑地部分が該当すると目される。1次調査区東・南縁辺は旧河道の河岸段丘右岸に当たるが、この端部は幅約3mに亘る埋め立てによって形成された地形であると推察される。その堆積土内からは遺物総数の7割強に当たる数量が出土しており、主体を占めた弥生土器のほか、縄文時代や平安時代の遺物が混在した状態であった。調査に際しては東辺・南辺ともS X100と命名して掘り下げを行ったが、断面観察から東辺部は西（手前）から東（奥）に向かって堆積している様相が看取されたのに対し、南辺部では水平堆積であった状況から、均しながら埋め立てられたと考えられる。

近年の発掘において県内でも弥生時代の調査事例が増

え、竪穴住居跡の検出が3遺跡で報告されている。山形市河原田遺跡（山形市教委2004）では3棟の住居跡と6基の墓跡が検出され、墓跡のうち5基は東北地方で2例目となる木棺墓である。出土した土器は桜井式に併行することから、中期後半の年代が当てはめられる。山形市向河原遺跡（山形埋文2005）では中期末～後期の住居跡7棟を検出し、うち1棟は石器剥片が多量に出土したことから工房跡と推測されている。本遺跡の東南1.2kmに位置する南陽市庚壇遺跡（山形埋文2007）では、一辺5m規模を測る隅丸方形の住居跡1棟が確認され、天王山式に併行する遺物が出土した。さらに、現在整理作業中の南陽市百刈田遺跡からは、2005年度の第3次調査で土坑墓に係わる16ヶ所の遺物集中ブロックが確認され、中期後半の復元完形土器が多数出土している（山形埋文2006）。

東北地方の弥生土器は地域性が顕著であり、中期には北部・中部・南部に加えて奥羽山脈の東西でも差異が認められる。基本的には河川に則した水系によって地域が形成されるようである。弥生中期には地域差が一層鮮明になり、①津軽地方、②下北半島と馬淵川流域、③八郎潟周辺と雄物川流域、④北上川流域、⑤仙台平野、⑥最上川流域、⑦阿武隈川流域、⑧相馬・磐城海岸、⑨会津地方といった諸地域に区分される（須藤1996）。

本遺跡出土土器は会津地方と密接な関連が指摘され、第Ⅰ群とした1本の工具で描かれる沈線文土器は、会津若松市一ノ堰B遺跡（福島県教委1988）出土土器や同市川原町口遺跡（会津若松市教委1994）第8群土器に類似しており、器種構成も壺・甕・鉢・高坏・蓋と共通する内容である。本遺跡では全形が窺える資料は極めて少ないが、上記遺跡出土例に照らせば、数的主体を占める壺には主に口縁形態の相違から4種の存在が知られる。このうち長頸壺と無頸壺では、口縁部から体部上半の最大径を測る位置まで文様が施文され、これを境に下半には地文となる縄文が付される。甕では体部上端に結節回転縄文を施すものが一般的で、本遺跡例とも共通するところである。第42図に示した蓋と高坏は全て1本引きによる沈線文で、川口町口遺跡では高坏脚部に切り込みによる窓を設けたものもある。218～221は蓋の鈕部資料と見なしたが、類例が見当たらず、鈕部にも沈線が引かれることを考慮すれば、あるいは下胴に